
論説

中国人学習者の現場指示における 指示詞コ・ソ・アの使用実態調査

——認知言語学の視点を加えて——

晋 萍

1. 本調査の目的

人やものを指し示すときに使う指示詞において、中国語は「这・那」の二分法であるのに対して、日本語は「コ・ソ・ア」の三分法である。中国の日本語教科書においては、初級の段階から指示詞が導入されているにもかかわらず、文化背景や認知方式の相違に影響され、初心者から上級学習者に至っても、指示詞「コ・ソ・ア」の使い分けに大変難しい問題点がある。

これまで、指示詞に関する研究は、記述的な対照研究が多く行われているが、外国における日本語学習者の使用実態に関する調査と研究が比較的すくない。指示詞「コ・ソ・ア」の使い分けの難しさを解明するためには、学習者の「コ・ソ・ア」の使用実態を調査する必要があると考え、中国人の日本語学習者を対象として調査を行い、さらに、母語話者（日本人）の使用実態と比較して、両者の相違をあきらかにする。

2. 本調査にかかわる先行研究

日本では、指示詞「コ・ソ・ア・ド」の実験的研究が行われるようにな

(2)

ったのは1950年代になってからである。話し手と聞き手をそれぞれ一定の位置に配置し、いろいろな場所に置かれたモノやヒトを、「コ・ソ・ア」のどれで指すかをみると言う実験である。

- 佐久間鼎 (1951)「指示の場と指す語」

「これ」は話し手自身の勢力範囲に属し、「それ」は相手の勢力範囲の中の物を指して言い、それ以外の範囲はすべて「あれ」に属すと述べて、話し手と聞き手を中心とする「なわばり」概念を導入した。

- 渡辺実 (1952)「指示の言葉」

話し手、聞き手の向き方による「コ・ソ・ア」の違いを実験によって示した。「そ」が向かい合いの場面での指示の言葉であり、「こ」が向かい合い、並びあい、両様の場面での指示の言葉であったのに対して、「あ」は並びあいの場面での指示の言葉なのである、と述べた。

- 高橋太郎 (1956)「場と場面」

やはり実験・調査の結果をもとに、話し手のなわばり（コ系のでるところ）が聞き手のなわばり（ソ系のでるところ）より小さく、コ系の外側のソ系も、聞き手のなわばりの中にある。ということを発見した。また、話し手と相手が接近したときには、話し手の後ろにもソ系が現れることがわかった。

- 高橋太郎・鈴木美都代 (1982)「コ・ソ・アの指示領域について」

短大生を対象とする実験を行い、話し手と聞き手の中間のものをア系で指す現象が現れてきた。

- 中村祐理子 (1990)「現在におけるコソアドの変化についての実験的研究」

10代～70代までの人を対象とした実験をした結果、コソアの使用について、世代差があることがわかり、10代、20代の中には、聞き手のそばの対象をア系で指すものが出てきたということもわかった。

- 高橋太郎・中村祐理子 (1992)「1991年、わかもののコソアド」

高校生・大学生・30～40代婦人を対象とした実験をした結果、世代差が生じてきていることが認められた。話し手と聞き手の距離が長くなるに従って、高校生・大学生の場合、ソ系の層の聞き手方向への伸びは止まるのに対して、30～40代婦人の場合、ソ系の層の聞き手方向への伸びは止まらない。

● 安部清哉（2008）「指示代名詞の現場指示の領域」

高橋・中村（1992）の調査法を用いて、日本人大学生を対象とした実験で、地域差が出ていること、話し手の後ろにあるものを指すときソ系を使っているものもあること、話し手と聞き手の間にア系が見られることなどが確認された。

3. 調査概要

- 調査対象者：日本語を専攻している中国人大学生 1 年生 41 名
- 調査時間：2011 年 6 月
- 調査現場：横 7.5 m、縦 9.5 m の教室
- 調査方法：基本的に高橋・中村（1992）の調査法に従い、安部（2008）を参照しながら、調査を行った。参考まで、図 1 に高橋・中村（1992）の教室図と調査票を示した。

図 2 のように教室の中の座席に座っている学生（話し手に当たる：H）たちが、教室の中の一定の箇所（第 1 回は 34 番、第 2 回は 31 番の場所）に立っている聞き手（話し手に質問する人：K）に対して、●印のところに立っている学生のことを話す場合、それぞれ、「この人」「その人」「あの人」のうちのどれを使うかをしらべて、コ・ソ・アの分布がどのようになるかを考察する。

(4)

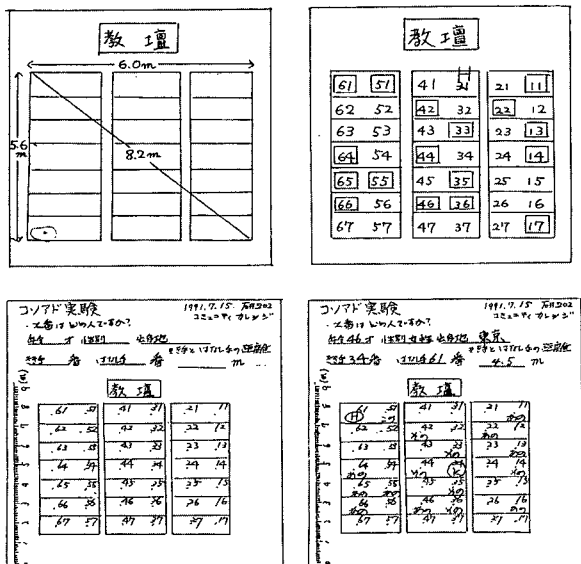


図1 高橋・中村(1992)「1991, わかもののコンアド」

コンアド調査 2011.6

Q () 番はどの人ですか?

A () 番は (この、その、あの) 人です。

(開かれた席番の下にいずれかを入れる)

教壇		
61		51
62		52
63		53
64		54
65		55
66		56
67		57

教壇		
41		31
42		32
43		33
44		34
45		35
46		36
47		37

教壇		
21		11
22		12
23		13
24		14
25		15
26		16
27		17

年齢: 漢 () 才 性別: 男・女 出身地: () 省 () 市

学年: () 年

懸手 (あなた) () 番 聞き手 (31・34に○印)

図2 本調査の調査票

4. 結果のまとめ方

回収された調査票の H と K を線分で結び、話し手と聞き手の間の距離によって、グループわけをする。

距離別グループのデータを 1 枚の分布図にあらわすのだが、各調査票の H の位置がバラバラなので、次の方法で一点にまとめる。

トレーシングペーパーの中心点を H とする。H を起点として、半直線を引く。

距離別に分けたそれぞれの調査票の H をトレーシングペーパー上の H にあて、H-K の線分とトレーシングペーパー上の半直線を重ね合わせ、半直線上に K の点を書き入れる。

次に調査票に記入されている「この」「その」「あの」をトレーシングペーパーに移すのだが、わかりやすいように、「この」は○、「その」は■、「あの」は☆の記号で表すことにする。

このようにしてできた図が、図 3 である。

5. 結果の分析

本調査は、日本語を専攻している中国人大学生を対象にしたものだが、日本人大学生を対象にした安部（2008）の調査結果と比較対照することにする。

5.1 聞き手 34 番での距離別分布図の分析

(i) 話し手から聞き手までの距離：0.5 m 以上～1 m 未満（3 人）

- 話し手を中心として、半径およそ 1.2 m の円を描くと、その円の内側はコ系が多く出ているが、話し手より聞き手に近い側にはソ系も少し見られる。

(6)

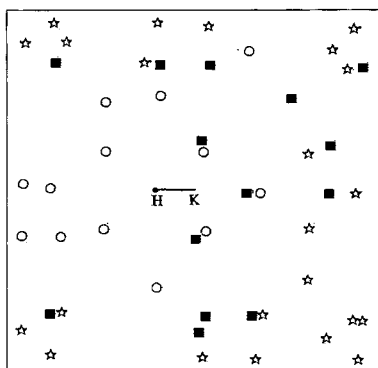


図3-①-i 聞き手34番 (i)
0.5 m 以上～1 m 未満 (3 人)

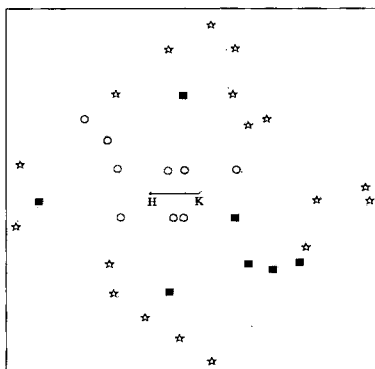


図3-①-ii 聞き手34番 (ii)
1 m 以上～1.5 m 未満 (2 人)

図3-① 聞き手34番での距離別分布図(コ:○, ソ:■, ア:☆)

- その円の外側に、やはり話し手を中心として、半径3mの円を描くと、その円の中は、コ系、ソ系、ア系が混在して出ている。話し手の後ろ側にコ系が多く見られて、ソ系とア系が聞き手側の前、左右側に多く見られる。
 - コ系、ソ系、ア系の混在している領域の外側はア系になるが、ソ系の例も現れている。
- (ii) 話し手から聞き手までの距離: 1 m 以上～1.5 m 未満 (2 人)
- 話し手を中心に、半径およそ1.7mの円を描くと、その円の中は、コ系の範囲で、話し手と聞き手のすぐまわりにコ系が見られる。
 - その円の外側に、やはり話し手を中心として、半径3mのより大きい円を描くと、その円の中は、コ系、ソ系、ア系が混在して出ている領域となっている。
 - ア系は、コ系、ソ系、ア系が混在した領域の外側に見られるが、ソ系の例もその領域に入っている。
- (iii) 話し手から聞き手までの距離: 1.5 m 以上～2 m 未満 (7 人)
- 話し手を中心に、半径およそ1.7mの円を描くと、その円の内側に、

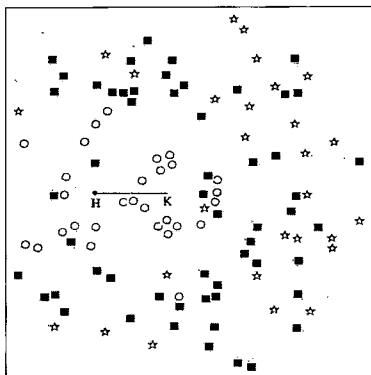


図3-①-iii 聞き手34番 (iii)
1.5 m 以上～2 m 未満 (7人)

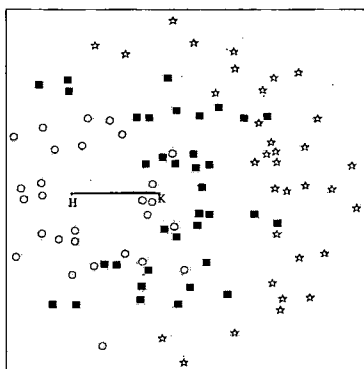


図3-①-iv 聞き手34番 (iv)
2 m 以上～2.5 m 未満 (6人)

コ系が多く出ている。話し手の後ろと左右にソ系が出ている。

- その円の外側に、やはり話し手を中心として、半径3 m のより大きい円を描くと、その円の中は、ソ系が多く出ている。コ系もかなり入っていて、しかも、聞き手側の後ろにコ系が見られる。ア系もこの領域にすこし混在している。

* コ系, ソ系, ア系が混在した領域の外側は、ソ系とア系が混在した領域になる。主に聞き手側寄りに分布している。

(iv) 話し手から聞き手までの距離: 2 m 以上～2.5 m 未満 (6人)

- 話し手を中心に半径1.7 m の円を描くと、その円の内側にコ系が出ている。話し手の周りに多く見られる。
- さらに、やはり話し手を中心に半径3 m の円を描くと、その内側にコ系とソ系が混在して出ている。ソ系が聞き手側寄りに多く見られる。聞き手の近くにコ系が出ている例もある。
- その円の外側に、ソ系と多くのア系が混在した領域がある。話し手から離れて広がっている。この領域にコ系も少し現れている。

(v) 話し手から聞き手までの距離: 2.5 m 以上～3 m 未満 (10人)

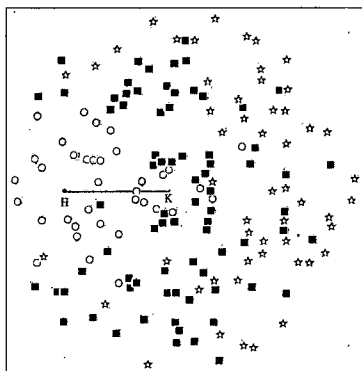


図3-①-v 聞き手34番(v)
2.5 m 以上～3 m 未満 (10 人)

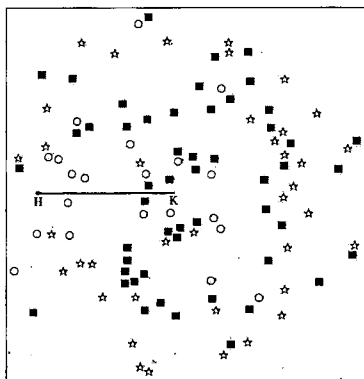


図3-①-vi 聞き手34番(vi)
3 m 以上～3.5 m 未満 (7 人)

- 話し手を中心に半径 1.7 m の円を描くと、その円の内側にコ系が出ている。話し手の周りに集中している。ソ系とア系もこの範囲に出ている例がある。
 - さらに、やはり話し手を中心に半径 3 m の円を描くと、その領域にソ系が多く出ている、主に聞き手側に集まっている。この領域にコ系とア系もすこし混在している。コ系が聞き手の近くに見られる。
 - その円の外側は、ア系が多く現れる領域になるが、ソ系もかなり混在している。コ系も聞き手寄りにこの領域に出ている例がある。
- (vi) 話し手から聞き手までの距離：3 m 以上～3.5 m 未満 (7 人)
- 話し手を中心に半径 2.3 m の円を描くと、その円内はコ系が多く出ている。しかし、コ系の領域内でもソ系とア系がかなり使われている。
 - また、その円の外側に、同じく話し手を中心に半径 3.5 m くらいの同心円を描くと、ソ系が多く現れる。しかし、ソ系の領域であっても、コ系とア系の混在している例がある。
 - その円の外側に、ア系が多く現れる領域がある。しかし、この領域にも、ソ系がかなり混在しており、コ系が現れる例もある。

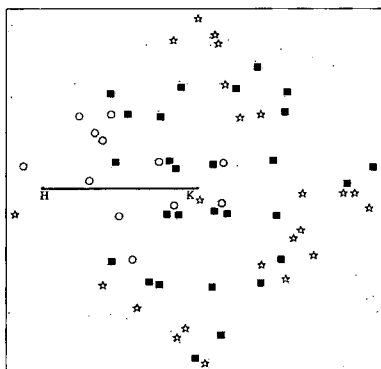


図 3-①-vii 聞き手 34 番 (vii)
3.5 m 以上～4 m 未満 (4 人)

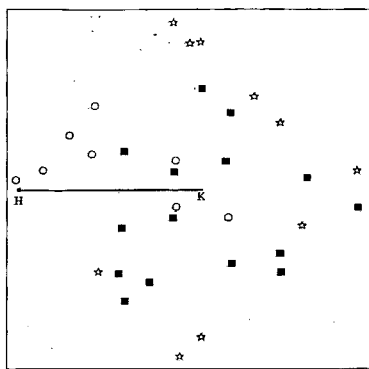


図 3-①-viii 聞き手 34 番 (viii)
4 m 以上～4.5 m 未満 (2 人)

(vii) 話し手から聞き手までの距離：3.5 m 以上～4 m 未満 (4 人)

- 話し手を中心に半径 2.3 m の円を描くと、その円内はコ系が多く出ている。しかし、この領域内にソ系とア系の例も現れている。しかも、ア系の例が話し手の近くに使われている。
- さらに、その円の外側に、同じく話し手を中心に半径 3.5 m くらいの同心円を描くと、ソ系が多く現れる領域となるが、コ系もア系もすこし混在している例がある。聞き手の近くにもコ系が使われている。
- ソ系の多く出る領域の外側、聞き手側の後ろ辺りの領域に、ソ系とア系が多く混在して出ている。この領域にもコ系の例が現れていて、しかも聞き手の近くに使われている。

(viii) 話し手から聞き手までの距離：4 m 以上～4.5 m 未満 (2 人)

- 話し手を中心に半径 2.3 m の円を描くと、その円内はコ系が出ている。コ系だけの領域になる。
- また、その円の外側に、同じく話し手を中心に半径 3.5 m くらいの同心円を描くと、ソ系が多く現れる領域になるが、コ系もア系もすこし混在している例がある。しかも、聞き手の近くにコ系が使われてい

る。

- ソ系の多く出る領域の外側、聞き手側の後ろ辺りの領域に、ソ系とア系が多く混在して広がって出ている。この領域にもコ系の例が現れていて、しかも聞き手の近くに使われている。

5.2 聞き手 34 番のまとめ

- ① コ系は、話し手と聞き手の間の距離のいかんにかかわらず、両者のまわりに使われているのがわかる。

話し手と聞き手の間の距離が 2 m 未満までのとき、両者のすぐまわりにコ系が現れている（図 3-①-i~iii）。話し手と聞き手の間の距離が 2 m 以上離れると、話し手を中心とした周囲にコ系がより多く現れている（図 3-①-iv~viii）。つまり、話し手と聞き手の間の距離が短ければ、話し手と聞き手をひとつのなわばりとしてとらえていることがわかる。

- ② 話し手と聞き手の間の距離が 2 m 以上離れると、話し手のなわばりがコ系になり、聞き手のなわばりがソ系になる傾向が見られる。ただし、聞き手のなわばりといっても、コ系も若干入り込んでいる。

- ③ ア系は、話し手と聞き手の間の距離が 2 m 未満までの場合、話し手と聞き手をひとつのなわばりとしてできたコ系の領域の外側の、ソ系が多く現れた領域のさらなる外側に分布しているが、話し手と聞き手の間の距離が 2 m 以上離れると、主に聞き手後方の、ソ系の多く出た領域の外側の広い範囲にわたって現れる。とはいえ、図 3-①-vi~vii に見られるように、話し手と聞き手の間の距離が 3 m 以上離れているにもかかわらず、話し手と聞き手のすぐ近くにア系が出ているのである。

5.3 安部（2008）の聞き手 34 番との比較対照

- ① 安部（2008）では、コ系が話し手と聞き手のすぐまわりに使われるのは、両者の距離が 3 m 未満までのときに見られて、両者の距離が 3 m 以上離れると、聞き手のまわりにコ系が見られない。

しかし、本調査の結果は、話し手と聞き手の間の距離のいかんにかかわらず、両者のまわりにコ系が使われているので、中国人学習者と日本人大学生とは、コ系の出方において、差が見られた。

- ② 安部（2008）では、話し手と聞き手の距離が 1.5 m 以上離れると、話し手のなわばりがコ系になり、聞き手のなわばりがソ系になるのだが、特に話し手と聞き手の距離が 2 m 以上になるとはっきりその傾向が見られた。

本調査では、話し手と聞き手の間の距離が 2 m 以上離れると、話し手のなわばりがコ系になり、聞き手のなわばりがソ系になる傾向が見られるが、聞き手のなわばりにコ系が若干入り込んでいる点では、安部（2008）と差が出ている。

- ③ 安部（2008）では、ア系は、話し手と聞き手から同方向、それに近い方向に見えるものを指すときにも使われ、話し手と聞き手の距離が離れるにつれ、主に聞き手後方の広い範囲にわたって指すときに使われていた。

本調査では、話し手と聞き手の間の距離が 3 m 以上離れている場合にも、話し手と聞き手のすぐ近くにア系が現れている点では、安部（2008）と差が見られる

5.4 聞き手 31 番での距離別分布図の分析

- (i) 話し手から聞き手までの距離：0.5 m 以上～1 m 未満（2 人）

- 話し手を中心として、半径およそ 1.4 m の円を描くと、円の内側にコ系が出ている。

(12)

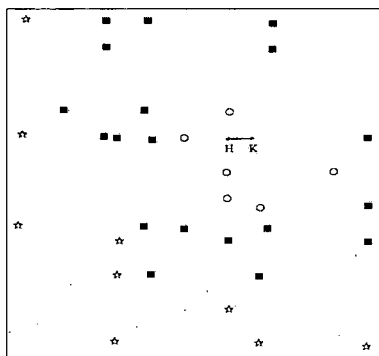


図3-②-i 聞き手31番 (i)
0.5 m 以上～1 m 未満 (2人)

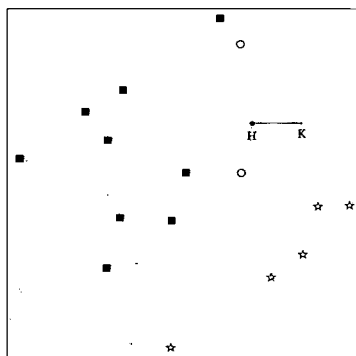


図3-②-ii 聞き手31番 (ii)
1 m 以上～1.5 m 未満 (1人)

図3-② 聞き手31番での距離別分布図

- そして、その円の外側に、ソ系が広がっており、半径3.2 mの円の
内側まではソ系の層となっている。
 - ア系は半径3.2 mの円の外側に広がっている。ソ系もこの領域に混
在している。
- (ii) 話し手から聞き手までの距離：1 m 以上～1.5 m 未満 (1人)
- 話し手を中心とした、半径2.1の円の内側にコ系が出ている。
 - その円の外側には、話し手の左側広範囲にソ系が出ている。
 - 話し手と聞き手の右下側にア系が出ている。
- (iii) 話し手から聞き手までの距離：1.5 m 以上～2 m 未満 (4人)
- 話し手を中心とした半径1.2 mの円の内側にコ系が出ている。
 - その円の外側から、半径4 mの円の内側までは、ソ系が多く現れる
領域になるが、この領域にコ系とア系も少し出ている。
 - 半径4 mの円の外側は、ア系の出ている領域になり、ソ系も少量出
ている。
- (iv) 話し手から聞き手までの距離：2 m 以上～2.5 m 未満 (4人)
- 話し手を中心とした半径1.7 mの円内に、コ系が見られる。

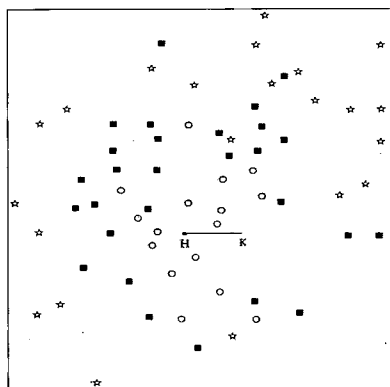


図 3-②-iii 聞き手 31 番 (iii)
1.5 m 以上～2 m 未満 (4 人)

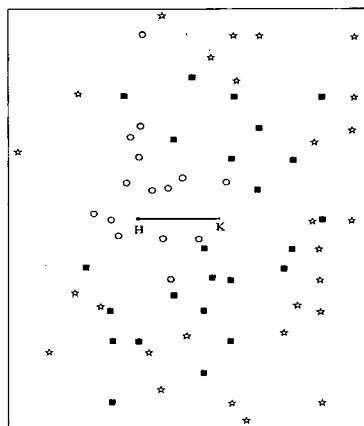


図 3-②-iv 聞き手 31 番 (iv)
2 m 以上～2.5 m 未満 (4 人)

- その円の外側から、半径 4.5 m の円の内側までは、ソ系が多く現れる領域になる。主に聞き手側寄りに現れている。ただし、この領域にコ系とア系も少し出ている。

- 半径 4.5 m の円の外側は、ア系の出ている領域になる。これも聞き手側のほうに広がっている。ソ系もこの領域に少量出ている。

(v) 話し手から聞き手までの距離：2.5 m 以上～3 m 未満 (5 人)

- 話し手を中心とした半径 2 m の円内に、コ系が多くでている。主に話し手のまわりに集中している。中にソ系も少し入っている。
- その円の外側に、ソ系とア系が混在して、広がって分布している。この中にコ系も少し見られる。

(vi) 話し手から聞き手までの距離：3 m 以上～3.5 m 未満 (5 人)

- コ系は、話し手を中心とした半径 2 m の円内に見られる。主に話し手のまわりに現れている。ただし、ソ系もア系もこの円内に少量見られる。
- ソ系は、主に、上の円の外側から、同じ話し手を中心とした半径 4 m の円内に広がっている。この範囲内には、コ系とア系が少量見られる。

(14)

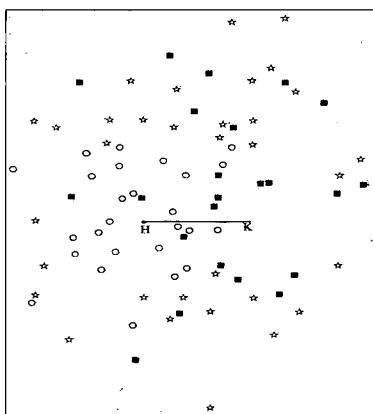


図 3-②-v 聞き手 31 番 (v)
2.5 m 以上～3 m 未満 (5 人)

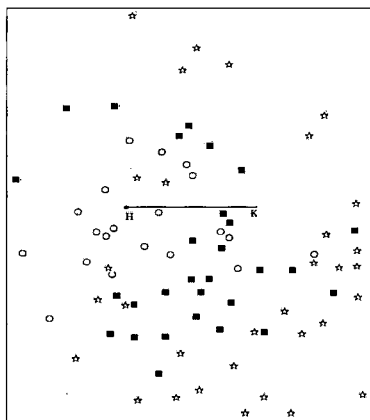


図 3-②-vi 聞き手 31 番 (vi)
3 m 以上～3.5 m 未満 (5 人)

- ア系は、半径 4 m の円外に広がっている。しかし、この範囲内にも、まだコ系とソ系が少量見られる。

(vii) 話し手から聞き手までの距離：3.5 m 以上～4 m 未満 (4 人)

- コ系は、話し手を中心に半径 1.8 m の円内に見られる。主に話し手のまわりに現れている。ただし、この円内に、聞き手に近いほうではソ系が見られる
- ソ系は、主に、上の円の外側から、同じ話し手を中心とした半径 3.7 m の円内に、聞き手側寄りに広がっている。しかし、この範囲内には、話し手寄りにコ系が見られ、ア系も見られる。
- ア系は、ソ系の外側、聞き手側の右上方に広がっている。

(viii) 話し手から聞き手までの距離：4 m 以上～4.5 m 未満 (5 人)

- コ系は、話し手を中心に半径 2 m の円内に広がっている。主に話し手のまわりに現れている。
- ソ系は、主に、上の円の外側から、同じ話し手を中心とした半径 4 m の円内に、聞き手側寄りに広がっている。

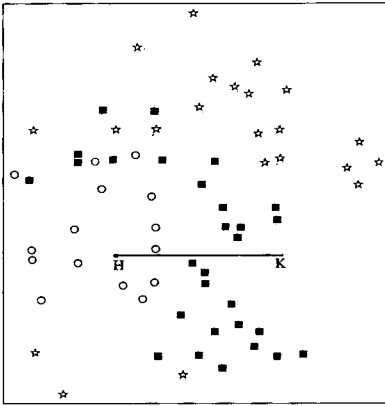


図 3-②-vii 聞き手 31 番 (vii)
3.5 m 以上～4 m 未満 (4 人)

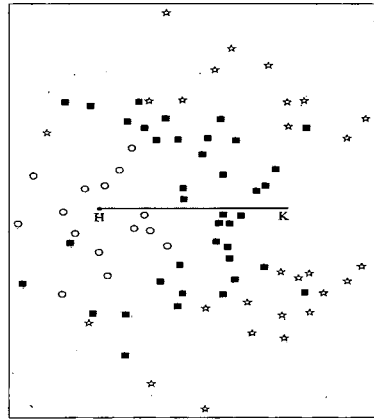


図 3-②-viii 聞き手 31 番 (viii)
4 m 以上～4.5 m 未満 (5 人)

- ア系は、ソ系の外側，聞き手側のほうに広がっている。
 - これは、わりとはっきりとしたコ・ソ・アの層が見られる図である。
- (ix) 話し手から聞き手までの距離：4.5 m 以上～5 m 未満 (4 人)
- コ系は、話し手を中心に半径 2.2 m の円内に広がっている。主に話し手のまわりに使われている。
 - ソ系は、主に、上の円の外側から、同じ話し手を中心とした半径 4.5 m の円内に、聞き手側寄りに広がっている。しかし、ソ系になる領域であっても、ア系の例も少し現れている。
 - ア系は、ソ系の外側，聞き手側のほうに広がっている。
 - これも、わりとはっきりとしたコ・ソ・アの層が見られる図である。
- (x) 話し手から聞き手までの距離：5 m 以上～5.5 m 未満 (4 人)
- コ系は、話し手を中心に半径 1.9 m の円内に出ている。主に話し手のまわりに集まっている。
 - ソ系は、上の円の外側，聞き手側寄りに広がっている。コ系の外側といっても、この領域にア系もともに見られる

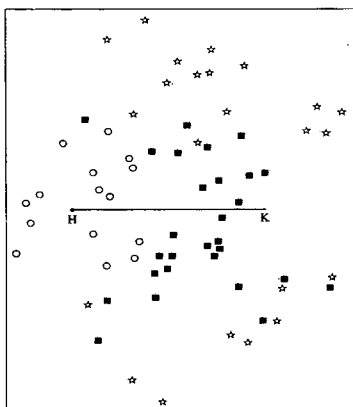


図 3-②-ix 聞き手 31 番 (ix)
4.5 m 以上～5 m 未満 (4 人)

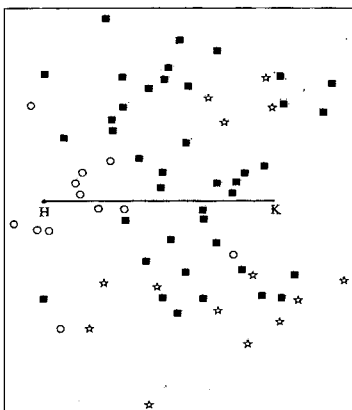


図 3-②-x 聞き手 31 番 (x)
5 m 以上～5.5 m 未満 (4 人)

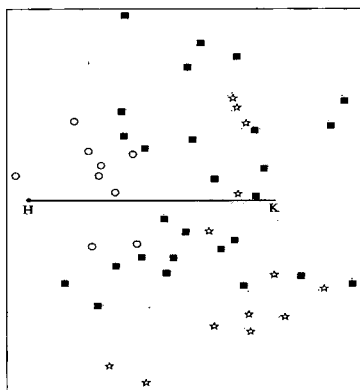


図 3-②-xi 聞き手 31 番 (xi)
5.5 m 以上～6 m 未満 (3 人)

- ア系は、ソ系と混合して使われているから、特にア系が多く出る領域が見られない。
- 話し手と聞き手が教室の一番前と後ろに位置しており、話し手の後方に指示対象がないため、このような図になっている

(xi) 話し手から聞き手までの距離：5.5 m 以上～6 m 未満（3人）

- コ系は、話し手を中心に半径 2.3 m の円内に出ている。主に話し手寄りの右上側に集まっている。
- ソ系は、上の円の外側から、同じ話し手を中心とした半径 5 m の円内に多く現れている。ただし、この範囲内にコ系が 2 例、ア系が 3 例混在している。
- ア系の多くは、ソ系が多く出る層の外側に現れている。
- 話し手と聞き手が教室の一番前と後ろに位置しており、話し手の後方に指示対象がないため、このような図になっている。

5.5 聞き手 31 番のまとめ

① 話し手の後ろはソ系が強い

話し手の背面にソ系が多く現れている。それは図 3-②-i～vi まで見られて、つまり話し手と聞き手の間の距離が 3.5 m 未満までの場合に見られる。この 6 枚の図を見れば、話し手の背面にア系も出ているが、ソ系と比べて、ずっとすくない。

② 話し手と聞き手の間にア系が見られる

話し手と聞き手の間にア系が出てくるのは、図 3-②-vi、図 3-②-xi である。話し手と聞き手の間は、ソ系で指示するのが一般的だが、本調査では、図 3-②-vi の 2 例と図 3-②-xi の 2 例、計 4 例が確認された。

③ 聞き手の後ろは約 2.4 m 後方から 3.4 m 後方までの間にソ系とア系が見られる

聞き手の背面に指示対象が出ているのは、図 3-②-i (0.5 m 以上～1 m 未満)、図 3-②-iii (1.5 m 以上～2 m 未満)、図 3-②-iv (2 m 以上～2.5 m 未満)、図 3-②-vi (3 m 以上～3.5 m 未満) の 4 図である。図 3-②-i では聞き手から 2.4 m 後方に■ [ソノ]、図 3-②-iii で

は聞き手から 2.4 m 後方と 3.1 m 後方に■ [ソノ] が見られる。図 3-②-iv では聞き手から 2.4 m 後方に☆ [アノ], 2.6 m 後方に■ [ソノ], また 3.4 m 後方に☆ [アノ] が見られる。図 3-②-vi では聞き手から 2.4 m 後方に☆ [アノ] が見られる。

5.6 安部 (2008) の聞き手 31 番との比較対照

- ① 安部 (2008) では、話し手の後ろはア系が強いという結果が出ている。

本調査では、話し手の後ろはソ系が強いという結果になっているため、中国人大学生と日本人大学生の間に差が見られる。つまり、日本人の学生が背面に出るものを指し示すとき、ア系を多く使うのに対して、中国人の日本語学習者が背面に出るものを指し示すとき、ソ系を多く使う傾向がある。

話し手が自分の後ろにあるものを指し示す場合にどのように表現するかについて、佐久間 (1951), 渡辺 (1952) に従えば、話し手の後ろにあるものを「コレ」、または「アレ」といって、指示するのが一般的だと解釈できる。その後、服部 (1961) では、話し手が自分の後ろにあるものを指して「ソレ」ということがあると主張し、さらに、高橋 (1956), 高橋・鈴木 (1982), 高橋・中村 (1992), 安部 (2008) により、話し手の背面にソ系がでることが確認された。それにもかかわらず、日本人は、話し手自身の後ろにあるものを指すとき、ソ系よりも、ア系のほうを多く使うのが事実である。しかし、中国人学習者は、話し手自身の後ろにあるものをさしているとき、ソ系を多く使っている。

- ② 話し手と聞き手の間にア系が見られる。この点においては、中国人学習者は、日本人の大学生話者と一致している。
- ③ 聞き手の後ろのコ・ソ・アの出方について、両者の間にまた差が見

られた。日本人大学生の場合、「聞き手の約 2 m 後方までがソ系, 2 m 以上後方はア系」という傾向である。およそ 2 m といった距離区分があるだろうと考えられることに加えて、聞き手が手を伸ばして置いてあるものを取りことができる距離を「ソノ」で表し、取ることができなさそうな距離を「アノ」で表すように思うと解釈されている。一方、中国人学習者の場合、そういう距離区分の傾向が見られない。

6. 結 び

以上、日本語を専攻している中国人大学生 1 年生 41 名を対象に、現場指示における指示詞「コ・ソ・ア」の使用実態を調査した。そして、母語話者の日本人大学生の使用実態との比較対照を通して、両者の間に大きな差が出ていることが 5.3 と 5.6 で明らかになった。

まとめてみれば、すなわち、コ系の使用は、日本人大学生とほぼ同じである。大差がでたのはソ系の使用である。ソ系の用法が、日本人大学生の聞き手の範囲より広く、ア系の領域にまで拡大している。そのため、はっきりとしたソ系の領域及びア系の領域が見られない。

また、日本語の指示詞「コ・ソ・ア」の 3 語形の使用調査といったにもかかわらず、2 語形のみで回答した学生がいた。具体的には、「コ」の使用がなく、「ソ・ア」で指示する回答者が 1 人、「ソ」の使用がなく、「コ・ア」で指示する回答者が 1 人、「ア」の使用がなく、「コ・ソ」で指示する回答者が 5 人出ているのである。これは、「这・那」の二分法体系に慣れた中国人大学生が、三分法体系である「コ・ソ・ア」の使い分けの習得において難しい問題点があるとうかがえる。

このような差が出る原因のひとつとして、中国人と日本人との認知方式が違ふことが考えられる。認知言語学で「事態把握」(池上嘉彦 2010) と呼ばれる概念がある。「事態把握」はヒトが事態を捉える認知的な営みで、

(20)

認知方式によって同じ概念内容でも違う言語表現と意味合いに導くことがあるという。現場指示における指示詞「コ・ソ・ア」の使用においては、日本人の場合、話し手と聞き手は「なわばり意識」のもとに、それぞれの指示詞を使い分けているのに対し、中国人の場合、そのような「なわばり意識」は持たないため、話し手は聞き手の領域への意識が少なく、自分から対象までの空間・時間・心理的な遠近判断によって指示詞を使い分けるのが一般的だと考えられる。

なお、今回の調査は、日本語を専攻している中国人大学生1年生を対象にしたものであるため、母語話者の中国人大学生との間に大きな差が出ている結果となったが、これからは、日本語専攻の2年生、3年生に対しても同じ調査を行い、日本語学習時間が長くなるにつれて、日本人と同じ「なわばり意識」を獲得するか、「コ・ソ・ア」の使用状況に変化が出るかどうか、を考察していきたい。

謝辞：

執筆者は2010年8月1日～8月30日、学習院大学東洋文化研究所東アジア〈未来知〉研究教育プログラムの客員研究員としてご招聘いただきました。学習院大学東洋文化研究所の方々及び学習院大学文学部日本語日本文学科教授安部清哉先生に厚く御礼を申し上げます。

また、本調査は上海海事大学校基金項目（項目NO:20100117）の助成を受けています。

参考文献

安部清哉（2008）「指示代名詞の現場指示の領域」『学習院大学文学部研究年報』第55輯

- 池上嘉彦 (2010) 「〈事態把握〉の相対性をめぐって」『日語学習与研究』第 5 期 日語学習与研究雑誌社
- 佐久間鼎 (1951) 「指示の場と指す語」『現代日本語の表現と語法 (改訂版) より一部一』くろしお出版より復刊 1983 (『指示詞』1992 ひつじ書房に採録)
- 高橋太郎 (1956) 「場面と場」『国語国文』25-9 京都大学文学部国語文学研究室 中央図書 (『指示詞』1992 ひつじ書房に採録)
- 高橋太郎・鈴木美都代 (1982) 「コ・ソ・アの指示領域について」『研究報告集』3 国立国語研究所報告 71 秀英出版
- 高橋太郎・中村祐理子 (1992) 「1991 年, わかもののコソアド」『麗澤大学論叢』3
- 中村祐理子 (1990) 「現在におけるコソアドの変化についての実験的研究」『麗澤大学紀要』51
- 服部四郎 (1961) 「『コレ』『ソレ』『アレ』と this, that」『英語青年』107-8 号 研究社 (『指示詞』1992 ひつじ書房に採録)
- 渡辺実 (1952) 「指示の言葉」『女子大文学』5 大阪女子大学文学会

A Survey of Chinese Learners in Using the Demonstratives: KO, SO, A—in the Viewpoint of Cognitive Linguistics—

JIN Ping

Key words: 指示詞 (Demonstrative), 現場指示 (Spatial Deixis), 中国人學習者 (Chinese Learners), 使用実態 (Usage Fact), 事態把握 (Construal)

This paper, based on the survey of the first year Chinese students who major in Japanese, discussess the use of Japanese demonstratives: KO, SO, A. After comparing with Japanese college students, we figured out that there are significant differences between Chinese students and Japanese students in using the words.

Chinese first year students use “KO” in almost the same way as Japanese college students. There are obvious differneces in using “SO”, “SO” is more widely used by Chinese students, it is often used in the same situation in which “A” should be used. There’s no significant difference between “SO” and “A”.

One of the reasons for the difference is the different cognitive ways between Japanese and Chinese. Japanese students use different demonstratives according to the speaker’s and the listener’s sphere of influence. While Chinese don’t have the sense of speaker’s or listener’s sphere of influence. They use different demonstritives according to the space, time, psychological distance.